

教員養成課程在籍学生の子ども観に関する一考察 (2) —「かわいい」をめぐる—

吉澤 千夏*・大瀧 ミドリ**
(平成23年9月30日受付;平成23年11月4日受理)

要 旨

本報告では、現在及び過去における子どもに対する「好き／嫌い／わからない」理由としての「かわいい」に着目し、教員養成課程在籍学生の子ども観についてテキストマイニングにより分析を行い、以下の結果を得た。

- (1) 現在においても、過去においても、子どもを「嫌い」な者よりも「好き」な者の方が、その理由として「かわいい」と回答する傾向がみられた。
- (2) 現在において子どもを「かわいい」と表す者は、子どもに対する好感を示す者が多いものの、子どもを「かわいい」と表さないことが必ずしも子どもに対する嫌悪を示すものではなく、むしろ、子どもとの実際の関わりやそこから得られるものを喜びと感じていることが示唆された。一方、過去において子どもを「かわいい」と表す者は、自分よりも年少の子どもから年長者として扱われることにより、幼い子どもを「かわいい」と感じていたことが示唆された。
- (3) 現在において子どもを「かわいい」と表す者は、過去において子どもから頼られ、慕われる経験を嬉しいと感じ、大人になったような気分になったり、自分の子どもへの関わりが子どもにプラスの変化をもたらしと感じていたことが明らかになった。

KEY WORDS

view on children 子ども観, teacher training university 教員養成課程, university students 大学生,
text mining テキストマイニング, lovelyかわいい

1 はじめに

本研究は、テキストマイニングの手法を用いて、教員養成課程の学生がどのように子どもを捉え、認識しているのかについて、学生の子ども観を捉えることを目的としている。近年、医学、看護、保育、教育分野等の学生の子ども観に関する研究^{(1)～(6)}が行われている。しかし、その多くは数量的なデータをもとに行われたものであり、テキストマイニングにより自由記述を分析した研究は少ない。テキストマイニングとは、自由に記述された回答を分析する手法である。これにより、テキストデータに含まれる本質的な情報を少数のカテゴリーで表現し、そのカテゴリーを用いて、他の数量的なデータとともに統計分析を行うことにより、被験者の思考等を分析することが可能となる⁽⁷⁾。

すでに、子どもに対する学生の「好き／嫌い／わからない」及びその理由を記述したテキストデータの分析から、いくつかの知見が得られている⁽⁸⁾。例えば、学生の多くは子どもを「好き」であること、子どもに好意を持つ者は子どもを「正直」「素直」「かわいい」と回答すること、子どもに嫌悪感を持つ者は子どもを「面倒」で、対処に「戸惑った」り、「どう接したらよいかわからない」と回答することが多くみられることが明らかにされている。さらに、幼い頃、子どもを「好き」だったと回答する学生が半数を占める一方で、幼い頃は子どもが「嫌い」「わからない」とする者も多く、子どもに対する「好き」「嫌い」は、幼い頃から継続する感情ではないこと、子どもを肯定的に受け止めるためには、子どもと関わる経験に加えて、十分な子ども理解が必要であることが示唆されている。以上のことに加えて、子どもを「好き／嫌い／わからない」と回答する理由として学生から挙げられている「かわいい」が、単に肯定的な意味だけではなく、様々な意味を持つと考えられるカテゴリーと関連することについても言及されている。

子どもを「かわいい」と捉えることや子どもの「かわいさ」については、これまでにも様々な考察がなされている。例えば、時代の経過とともに、女子大学生は子どもならどんな子どもでも「かわいい」と感じる傾向にあること、出産・育児経験の有無にかかわらず、どのような大人においても子どもは「かわいい」存在として普遍化される傾向にあることが指摘されている⁽⁹⁾。さらに、子どもを「かわいい」と表すことは「小ささ」「女の子」といった「かわいい評価基準」による規範的な行為であるという⁽¹⁰⁾。しかし、これらの研究は2件法による調査を分析した

ものや保育場面における事例を分析したものであり、子どもを「かわいい」と表すことが子どもに対するどのような評価と関連しているのかを具体的に明らかにしたものではない。

そこで本報告では、子どもに対する現在及び過去の感情（「好き／嫌い／わからない」）の理由としての「かわいい」に着目し、教員養成課程在籍学生の子どもに対する「かわいい」という感情についてテキストマイニングにより検討する。

2 方法

2.1 研究対象

研究対象は、本学において前期に開講されている「家庭」を受講した学生531名（2010年度282名，2011年度249名）である。本報告では、教員養成課程を希望して入学してきた学生の子ども観を捉えることを目的として、現時点において「子ども」に関する専門的知識・経験が少ないと考えられる学部1年生344名（2010年度174名，2011年度170名）を対象として分析を行う。

2.2 調査方法

調査は、自由記述式の調査紙を用いて行う。調査紙は2010年度版は12項目，2011年度版は10項目で構成されている。本報告では、双方に共通する10項目のうち，下記の4項目について分析を行う。

- ・私は子どもが（「好き／嫌い／わからない」等を自由に記述）です
- ・その理由は？（自由記述）
- ・私は子どもの頃，子どもが（「好き／嫌い／わからない」等を自由に記述）でした
- ・その理由は？（自由記述）

「子どもの頃」については，回答者によって様々な解釈がなされることが想定される。そこで本研究では，回答者自身が思い出すことが可能である最も若い頃を対象とするために，原則として「子どもの頃」を回答者自身が「小学生以前」として提示している。

2.3 分析方法

分析にはPSAW Text Analytics for Surveysによるテキストマイニングにより抽出されたカテゴリーを用いる。本報告では，先行研究^⑧において抽出されたキーワード及び感性タイプをもとに，自由記述によって得られた回答をカテゴリー化した後，分析を行う。本報告では，「かわいい」が他のキーワード及び感性タイプとどのような関係にあるのかを捉えるために，先行研究^⑧においては「良い－褒め・賞賛」に含まれている「かわいい」（かわいい，かわいらしい等を含む：以下「かわいい」と表記する）を抽出した後，新たにカテゴリーとして採用し，以下の分析に用いる。

調査紙の内容，キーワード並びに感性タイプの抽出に関する詳細は，先行研究^⑧に記載されている。

3 結果及び考察

「家庭」を受講していた学部1年生344名（2010年度174名，2011年度170名）中，308名（2010年度165名，2011年度143名）から回答が得られた。回収率は89.5%である。以下，308名を対象として分析を行う。

対象者308名のうち，『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』との質問に対して，「好き（大好き等を含む）」と回答した者（以後，「好感」群）は270名（87.7%），「嫌い（苦手等を含む）」と回答した者（以後，「嫌悪」群）は16名（5.2%），「わからない」と回答した者は21名（6.8%），無記入が1名（0.3%）である。また，対象者308名のうち，『私は子どもの頃，子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』との質問に対して，「好き（大好き等を含む）だった」と回答した者（以後，「過去好感」群）は192名（62.3%），「嫌い（苦手等を含む）だった」と回答した者（以後，「過去嫌悪」群）は60名（19.5%），「わからない」と回答した者は55名（17.9%），無記入が1名（0.3%）である。

以下の分析にあたっては，まず『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』『私は子どもの頃，子どもが「好き／

嫌い／わからない』だった』と回答した理由についての自由記述をPSAW Text Analytics for Surveysにより分類し、カテゴリーを抽出する。このうち、「かわいい」等が含まれている「良い－褒め・賞賛」カテゴリーから「かわいい」を抽出し、単独のカテゴリーを作成し、分析を行う。これにより、抽出されたカテゴリーは『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』の理由については21カテゴリー、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』については22カテゴリーとなる（表1、表2）。

表1 子どもが「好き／嫌い／わからない」理由 (n)

肯定的タイプ 良い－良い (167), 良い－褒め・賞賛 (除「かわいい」) (16), 良い－楽しい (75), 良い－快い (41), 良い－好き (39), 良い－嬉しい (22), 良い－幸福 (6)
否定的タイプ 悪い－悪い (30), 悪い－不満 (18), 悪い－嫌い (23), 悪い－困っている (6)
その他 その他－驚き (22)
キーワード 一緒 (39), 関わる・触れ合う・接する (34), 言動・発想 (32), 元気 (26), 多い (14), 心 (9), 感じる (9), 成長 (8)
かわいい (149)

表2 子どもが「好きだった／嫌いだった／わからない」理由 (n)

肯定的タイプ 良い－楽しい (110), 良い－好き (72), 良い－褒め・賞賛 (除「かわいい」) (3), 良い－嬉しい (25), 良い－良い (11)
否定的タイプ 悪い－悪い (17), 悪い－嫌い (29), 悪い－不満 (47), 悪い－批判 (13), 悪い－不快 (13), 悪い－悲しみ全般 (3)
キーワード 年下 (126), 世話・面倒 (57), きょうだい・いとこ (61), 年上 (24), 考える・意識する (19), 記憶・覚えていない (15), 組織名 (15), 関わる・接する (14), なつく・慕う (10), 近所 (10)
かわいい (269)

3. 1 『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』の理由としての「かわいい」

『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』の理由として「かわいい」の表出が認められたのは308名中149名 (48.4%) (以後、「かわいい有」群) であり、159名 (51.6%) からは表出されない (以後、「かわいい無」群)。「かわいい」の表出の有無と子どもに対する「好感」群・「嫌悪」群についてクロス集計を行った結果を示したのが表3である。直接確率法による検定を行った結果、有意な偏りが認められる ($p=.000$)。さらに、「かわいい有」群・「かわいい無」群と「好感」群・「嫌悪」群の間で相関分析を行った結果、有意な正の相関が認められる ($r=.210$, $p=.000$)。これらのことから、「かわいい有」群は有意に「好感」群が、「かわいい無」群は有意に「嫌悪」群が多く、互いに相関関係にあることが明らかになる。

次に、現在の理由における「かわいい」が他のどのようなカテゴリーと関連しているかを捉えるために、「かわいい」と各カテゴリー (20カテゴリー) の表出の有無について相関分析を行った結果、「良い－良い」 ($r=.146$, $p=.010$) の1カテゴリーとの間に正の相関が、「良い－好き」 ($r=-.154$, $p=.007$), 「良い－嬉しい」 ($r=-.117$, $p=.040$), 「悪い－悪い」 ($r=-.121$, $p=.034$), 「悪い－嫌い」 ($r=-.127$, $p=.026$), 「心」 ($r=-.168$, $p=.003$) の5カテゴリーとの間に負の相関が認められる。それ以外の14カテゴリーとの間には有意な相関は認められない。

具体的な記述をみると、正の相関が認められた「かわいい」と「良い－良い」では、子どもの「素直」さや「無邪気」さを「かわいい」と感じていることが伺える。一方、「かわいい」と負の相関が認められたカテゴリーをみると、「悪い－悪い」「悪い－嫌い」のように、子どもを嫌い・苦手と思う学生から子どもと関わることへの戸惑い等が理由として挙げられている。さらに、「良い－好き」「良い－嬉しい」のように、子どもを肯定的に受け止めたり、子どもの「心」に言及するもの等、子どもを好きと回答する学生から表出されたものも含まれている。

正の相関	「かわいい」と「良い－良い」 ・子どもは無邪気で、かわいくてわがままや生意気なことをたくさんいうけど、鍛えがいがあるというか、教えがいがあるから。 ・素直でかわいい部分があるからです。夢中になって、遊んだりする姿がかわいいからです。
------	--

負の 相関	「かわいい」と「良いー好き」 ・子どもと一緒に遊んだり、話をしたりすることが好きだから。 ・子どもの笑った顔が好き。一緒に遊んだりするのが好き。小さい子とお話をするのが好きだったから、子どもは好き。
	「かわいい」と「良いー嬉しい」 ・成長を見届けることがとてもうれしいから。 ・自分に向けられた笑顔を見ると、とてもうれしいし、元気がもらえるから。守りたくなるような存在だから。
	「かわいい」と「悪いー悪い」 ・いうことを聞かない、理解できない時があるから。 ・どう接していいかわからない。
	「かわいい」と「悪いー嫌い」 ・すぐに泣いたり、怒ったりして、一つ一つのモーションが突然で読めないし、周りが静かな子どもが多かったので、騒いだりする子どもが苦手、というより慣れていない。 ・妹や年下のいとこの世話をしてきたし、今まで子どもと関わる機会が多かったから。でも、手加減とかを知らないで体当たりしてきたり、悪ふざけをし過ぎるところはちょっと苦手。
	「かわいい」と「心」 ・本当に心の底から自分を表現できる。一緒にいると癒される。 ・心が読めないから。

* は嫌悪群

「かわいい」と正の相関が認められる「良いー良い」は、「無邪気」「素直」といったキーワードにより構成されている。つまり、子どもに対する現在の「かわいい」は子どもの「素直」さや「無邪気」さを評価していることが明らかになる。言い方を変えれば、子どもを「素直」「無邪気」な存在として捉える者は、それを「かわいい」と評価しているとも考えられる。一方、「かわいい」と負の相関が認められる項目のうち、肯定的な意味を持つ「良いー好き」「良いー嬉しい」では、子どもと一緒に遊んだり、話をしたりすることが好き、子どもの成長を見届けことが嬉しい、子どもの笑顔が好き・嬉しい等が挙げられている。実際に子どもとともに遊び、そこから成長を感じ、子どもの笑顔に喜びを感じる者は、子どもを「かわいい」と表しない傾向がみとれる。

このことから、現在において子どもを「かわいい」と表現する者は子どもに対する好感を示す者が多いものの、子どもを「かわいい」と表しないことが必ずしも子どもに対する嫌悪を示すものではなく、むしろ子どもとの実際の関わりやそこから得られるものを喜びと感じていることが示唆される。

3. 2 『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』の理由としての「かわいい」

『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』の理由としての「かわいい」の表出が認められたのは308名中39名（12.7％）（以後、「過去かわいい有」群）であり、269名（87.3％）からは表出されない（以後、「過去かわいい無」群）。「かわいい」の表出の有無と子どもに対する「過去好感」群・「過去嫌悪」群についてクロス集計を行った結果を示したのが表4である。直接確率法による検定を行った結果、有意な偏りが認められる（ $p=.001$ ）。さらに、「過去かわいい有」群・「過去かわいい無」群と「過去好感」群・「過去嫌悪」群の間で相関分析を行った結果、有意な正の相関が認められる（ $r=.206$, $p=.001$ ）。これらのことから、「過去かわいい有」群は有意に「過去好感」群が、「過去かわいい無」群は有意に「過去嫌悪」群が多く、互いに相関関係にあることが明らかになる。

次に、過去の理由における「かわいい」が他のどのようなカテゴリーと関連しているかを捉えるために、「かわいい」と各カテゴリー（21カテゴリー）の表出の有無について相関分析を行った結果、「なつく・慕う」（ $r=.151$, $p=.008$ ）の1カテゴリーとの間にのみ正の相関が認められる。それ以外の20カテゴリーとの間には有意な相関は認められない。

具体的な記述をみると、正の相関が認められた「かわいい」と「なつく・慕う」では、自分よりも幼い子どもが自分を「お姉さん（またはお兄さん）」として認識し、関わっていることを「かわいい」と感じていることが伺える。

「かわいい」と「なつく・慕う」

- ・かわいいと思っていたから。“お姉さん”と呼んでくれるのが嬉しかったから（慕ってくれるのが嬉しかったから）。
- ・小さい頃から、子どもは好きでした。小学校高学年の時に、低学年の子たちはとても慕ってくれて、かわいかったからです。

＊いずれも好感群

ここでの過去の自分は自分自身も「子ども」であり、「子どもであった自分」が他の「子ども」を「好き／嫌い／わからない」理由について回答している。子どもであった自分が子どもを「かわいい」と表すとは、どのような意味を持つのだろうか。先行研究⁸⁾によれば、幼い頃に子どもを好きだったか否かは、自分よりも年下の子どもと関わる際の子どもの受け止め方に起因している。子どもをかわいいと思い、子どもの世話をすることを「好き」「楽しい」と受け止める者は子どもを「好き」であるものの、子どもとの関わりを「手間がかかる」「面倒」なことと感じる者は子どもを「嫌い」であることが示唆されている。上記の結果と合わせて考えると、子どもである自分が、自分よりも年少である幼い子どもの世話をすることによって、その子どもからなつかれ、慕われることが、幼い子どもを「かわいい」と感じる要因になることが推察される。

「なつく・慕う」は、慣れ親しんだり、親近感を抱いたりするのみならず、目上の人に対する憧れや尊敬といった意味を含む言葉である。年少の子どもと慣れ親しみ、その子どもから親近感を持たれるとともに、幼い子どもから憧れや尊敬を抱かれることで、そのように自分をみている子どもを「かわいい」と感じるようになると考えられる。

このことから、過去において子どもを「かわいい」と表現することは、自分よりも年少の子どもから年長者として扱われることを通して、幼い子どもを「かわいい」と感じていることが示唆される。

3. 3 現在と過去（子どもの頃）の『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』の理由としての「かわいい」とそれ以外のカテゴリーとの関連

まず、現在と過去の『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』の理由としての「かわいい」の表出についてクロス集計を行った結果を示したのが表5である。直接確率法による検定を行った結果、有意な偏りは認められない（ $p=.173$ ）。さらに、「かわいい有」群・「かわいい無」群と「過去かわいい有」群・「過去かわいい無」群の間で相関分析を行った結果、有意な相関は認められない（ $p=.157$ ）。これらのことから、子どもに対する「好き／嫌い／わからない」の理由としての「かわいい」は、現在と過去の間に関連はみられないことが明らかになる。

表3 子どもが「かわいい」から「好き・嫌い」なのか

	n (%)	
	好感群	嫌悪群
かわいい有群	140 (99.3)	1 (0.7)
かわいい無群	130 (89.7)	15 (10.3)

$p=.000$

表4 子どもが「かわいい」から「好き・嫌い」なのか（過去）

	n (%)	
	過去好感群	過去嫌悪群
過去かわいい有群	36 (97.3)	1 (2.7)
過去かわいい無群	156 (72.6)	59 (27.4)

$p=.001$

表5 現在と過去の「かわいい」のクロス表

	n (%)	
	過去かわいい有群	過去かわいい無群
かわいい有群	23 (84.6)	126 (84.6)
かわいい無群	16 (10.1)	143 (89.9)

$p=.173$

3. 3. 1 現在の『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』の理由としての「かわいい」と過去（子どもの頃）の『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』の理由の関連

次に、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」』の理由としての「かわいい」と、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』の理由との関係を捉える。子どもに対する現在の「かわいい」と過去の各カテゴリー（21カテゴリー：「かわいい」を除く）の表出の有無について相関分析を行った結果、「良い－嬉しい」（ $r=.117$, $p=.041$ ）, 「良い－良い」（ $r=.129$, $p=.024$ ）の2カテゴリーとの間に正の相関が, 「悪い－批判」（ $r=-.139$, $p=.015$ ）の1カテゴリーとの間にのみ負の相関が認められる。それ以外の18カテゴリーの間には有意な相関は認められない。

具体的な記述をみると、「かわいい」と正の相関が認められた「良い－嬉しい」では、子どもが自分を「頼った」り, 「慕う」ことを「嬉しい」と表している。また, 「良い－良い」では、子どもとのかかわりの中で「大人になった気分になれた」り, 年少の子どもと関わることで子どもが「笑顔になってくれる」等が子どもを好きな理由として挙げられている。一方, 「かわいい」と負の相関が認められた「悪い－批判」では、子どもを嫌い・苦手と思う

学生から子どもを「生意気」「ずるい」と感じる事が理由として挙げられている。

正の 相関	「かわいい」と「良いー嬉しい」 ・自分は兄弟が多く、よく小さい頃に一緒に登校したりしていたが、自分を兄として頼ってくれることがとても嬉しかったから。 ・妹がいたっていうのもあり、面倒をみるのが好きだったから。自分より小さい子たちが、慕って甘えてくれるのがうれしかったから。
	「かわいい」と「良いー良い」 ・お世話をしていると、自分が大人になった気分になれた。 ・かまってあげると、笑顔になってくれるから。
負の 相関	「かわいい」と「悪いー批判」 ・生意気だから。 ・小さい子の面倒を見るのは嫌いではなかったが、弟をみると、自分より少し小さいだけで甘やかされているというのが、うらやましくてずるいと思ったから。

* は嫌悪群

「かわいい」と正の相関が認められる「良いー嬉しい」「良いー良い」は、いずれも肯定的な意味を持つカテゴリーである。子どもから頼られる、慕われる、甘えられる、さらに子どもと関わることで子どもの笑顔を見ることが出来たり、関わりを通して大人になったような気分になるなど、前項において過去の「かわいい」と正の相関が認められた過去の「なつく・慕う」と関連するようなキーワードが挙げられている。先の分析から、子どもに対する現在の「かわいい」と過去の「かわいい」には関連は認められない。しかし子どもに対する現在の「かわいい」は、過去において子どもを「好き」であった理由「良いー嬉しい」「良いー良い」と関連している。また、子どもに対する現在の「かわいい」は、現在において子どもを「好き」である理由「良いー良い」とも関連している。子どもに対する現在の「かわいい」は、現在において子どもを「素直」で「無邪気」な存在として認識しているのみならず、過去において幼い子どもと関わり、その子どもたちになつかれ、慕われることを通して形成されたものであることが示唆される。

このことから、現在において子どもを「かわいい」と表する者は、過去において子どもから頼られたり、慕われたりする経験を嬉しいことと感じていたり、年少の子どもと関わることで大人になったような気分になったり、自分の子どもへの関わりが子どもにプラスの変化をもたらすと感じており、それが子どもを「好き」な理由として挙げられていることが明らかになる。

3. 3. 2 過去（子どもの頃）の『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』の理由としての「かわいい」と現在の『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』の理由の関連

次に、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』の理由としての「かわいい」と、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』の理由との関係を捉える。子どもに対する過去の「かわいい」と現在の各カテゴリー（20カテゴリー：「かわいい」を除く）の表出の有無について相関分析を行った結果、いずれのカテゴリーとも有意な相関は認められない。

このことから、過去における子どもに対する「かわいい」は、現在の『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』の理由と関連がないことが明らかになる。

先行研究^⑧によれば、現在及び過去の子どもに対する「好き」「嫌い」には関連が認められない。しかし本報告によれば、子どもに対する過去の「かわいい」は現在の『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』の理由とは関連しないものの、子どもに対する現在の「かわいい」は、過去の『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』の理由との関連が認められる。子どもに対する現在の「かわいい」は、学生が子どもに対して過去に抱いた感情に影響を受けていることが推察される。また、過去における年少の子どもとの関わりによって、その子どもから頼られ、慕われることやその関わりが子どもに変化をもたらし、自分自身の成長を感じる等、自分よりも年少の子どもとの関わりを通して、自分自身に有能感を感じるによって、現在の子どもに対する「かわいい」という感情が生じることが示唆される。さらに、子どもに対する過去の「かわいい」は、過去の「なつく・慕う」と正の相関

が認められることから、「なつく・慕う」は学生が子どもを「かわいい」と表するにあたって重要な意味を持つキーワードであると考えられる。

4 おわりに

本報告では、テキストマイニングの手法を用いて自由記述回答をカテゴリー化した後、現在及び過去における子どもに対する「好き／嫌い／わからない」理由としての「かわいい」に着目し、他のカテゴリーとの関連等について分析を行った。抽出された各カテゴリーの表出の有無について統計分析を行ったため、子どもを「かわいい」と表することとその他のカテゴリーとの関連を捉えるにとどまった。今後は、子どもを「好き／嫌い／わからない」と回答する理由、子どもを「かわいい」と表することについてのモデル生成を行う等、学生の子ども観について更なる分析が求められる。

本研究は、平成23年度上越教育大学研究プロジェクト（若手研究）の助成を受けて行われたものである。ここに記して感謝申し上げる。

引用文献

- (1) 細野恵子, 市川正人, 上野美代子 (2009) 看護系学生と非看護系学生および保育系学生の乳幼児に対するイメージ, 名寄市立大学紀要, 3, 79-86.
- (2) 市川正人, 細野恵子, 上野美代子 (2009) 看護学生と他学科学生の乳幼児に対するイメージ, 名寄市立大学紀要, 3, 87-92.
- (3) 筒井潤子 (2009) 教員養成における「実習体験」の本質的意味について: 小学校と養護施設, 双方をつなぐ実習体験から, 学校メンタルヘルス, 11, 63-70.
- (4) 岡田恵子 (2010) 医療保育科学生の入学から卒業までの各実習における子ども観の変化, 川崎医療短期大学紀要 30, 69-75.
- (5) 滝口圭子 (2011) 教育学部学生の子ども観は所属コースにより異なるのかー大学1年生を対象とした質問紙調査, 三重大学教育学部研究紀要, 62, 283-292.
- (6) 高木有子, 池田幸恭, 菱谷純子, 梁明玉, 落合幸子, 医療系大学生が捉える平成時代の子育て観と子ども観の探索的検討, 茨城県立医療大学紀要, 16, 75-84.
- (7) SPSS (2010) Text Analytics for Surveys Training course.
- (8) 吉澤千夏, 大瀧ミドリ (2011) 教員養成課程在籍学生の子ども観に関する一考察, 上越教育大学研究紀要, 30, 221-233.
- (9) 荒川志津代 (2005) 子どものかawaiiさに関する子ども観の比較ー1980年と2005年の場合ー, 日本家政学会誌, 56(10), 729-736.
- (10) 三橋弘次, マシユー・バーデルスキー (2009) 「かわいい女の子」はいかにして可能かー保育士と子どもとの相互行為分析ー, 国立女性教育会館研究ジャーナル, 13, 49-58.

A Study on How Students at a Teacher Training University View Children (2)

—Why Do the Students Feel Children Are lovely? —

Chinatsu YOSHIZAWA* • Midori OTAKI**

ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify how the students of a teacher training university feel about children. The text mining method was used to analyze the data. This study focused on the word “kawaii” (“lovely”). The results of the study were as follows:

(1) At present and in the past, students who like children tend to use “kawaii” when describing children more than students who dislike children.

(2) Many students who use the word “kawaii” to describe children at present like children. However, the students who do not use the word “kawaii” when describing children do not necessarily dislike children; they may have pleasant feeling about their relationship with children. Moreover, the students who used “kawaii” when describing children in the past felt them to be “kawaii” based on the experiences of children’s adoring the students.

(3) The students who use “kawaii” describing children at present feel happy because in the past they had the experience of being adored by children when they were young. Also, the students felt as if they were grown-ups when they were adored by children. Furthermore, the students felt that they had some positive influence on the children.

* Natural and Living Science

** Tokyo Kasei University